



弄
び

—前編—

基本 10枚
差分 119枚



凄惨。辺りの状況を表す言葉にこれ以上お似合いの言葉もなかった。
地面だけでなく壁一面にもおびただしいほどの血が飛び散っており
それは思わず目を背けたくなってしまうほどだ。



そして、その源であったであろう肉塊。
原型を留めないほどに引きちぎられたそれは
今やピクリとも動くことはなかった。

そんな中で場違いとしか言い表せない少女は表情一つ変えず直立していた。

「任務完了」

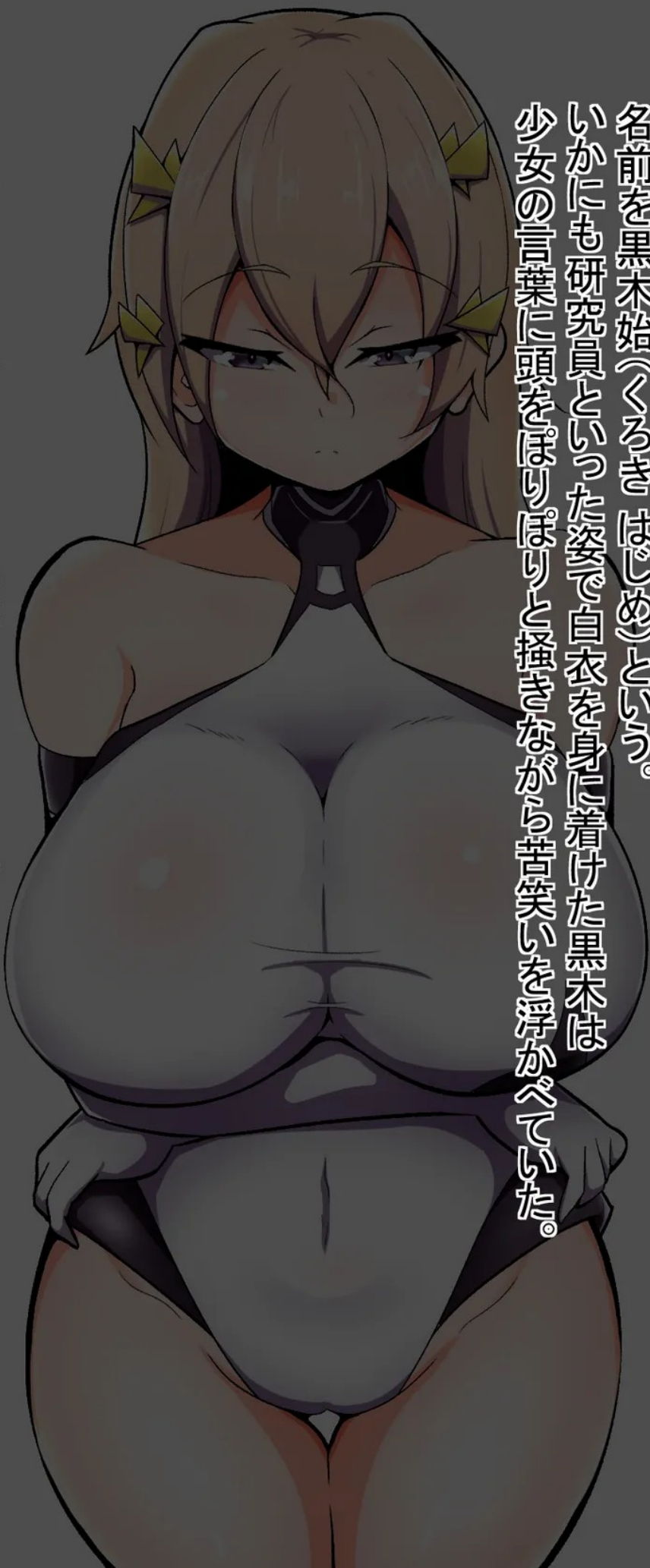
そのコスチュームを見れば彼女が一般人でないことは明らかだ。
白と黒の絡まるボンテージ姿はその少女が異端であることを容易に想像させた。
そう、この辺り一面に広がる肉塊を作り出したのは彼女だった。



しかし、不思議なことに彼女の身体には一滴の血飛沫すらありはしなかった。
返り血はもちろん、一つの傷すらありはしない。
それは彼女がこの無数に転がる肉塊たちに対して
圧倒的な力の差を有していることを意味していた。

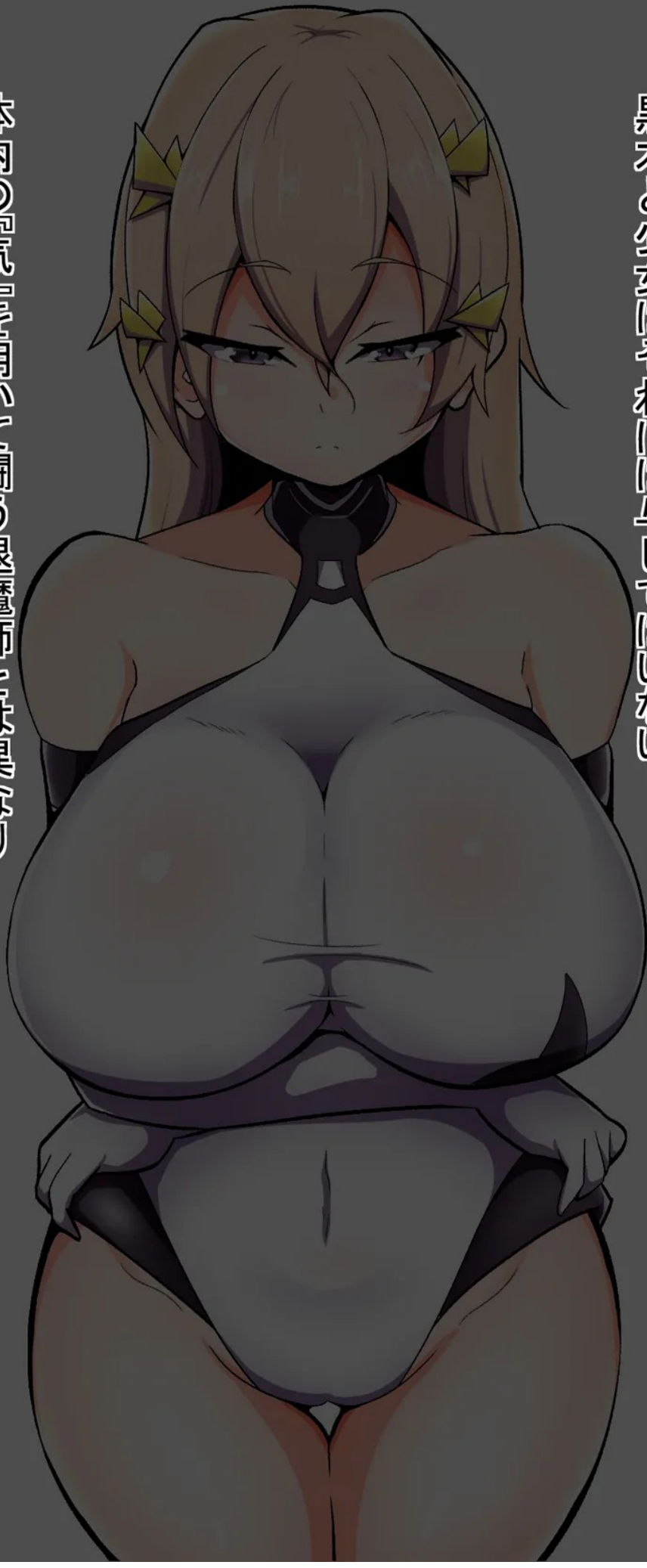
「お疲れ様」
「疲れるほどの」とはしていません」

帰還した少女を出迎えたのは高身長で髭面、メガネを掛けた優男だった。
名前を黒木始（くるきはじめ）という。
いかにも研究員といった姿で白衣を身に着けた黒木は
少女の言葉に頭をぽりぽりと掻きながら苦笑いを浮かべていた。



この男もまた少女と同じ組織に属している。
その組織は人に害を為す存在と相対することを目的として存在している。
その害を為す存在が『淫魔』だ。

淫魔は主に女性を標的とし、快楽狂いにするという質の悪い化け物である。
この世にはその淫魔を退治する退魔師という存在もありはするが
黒木と少女はそれには与してはいない。

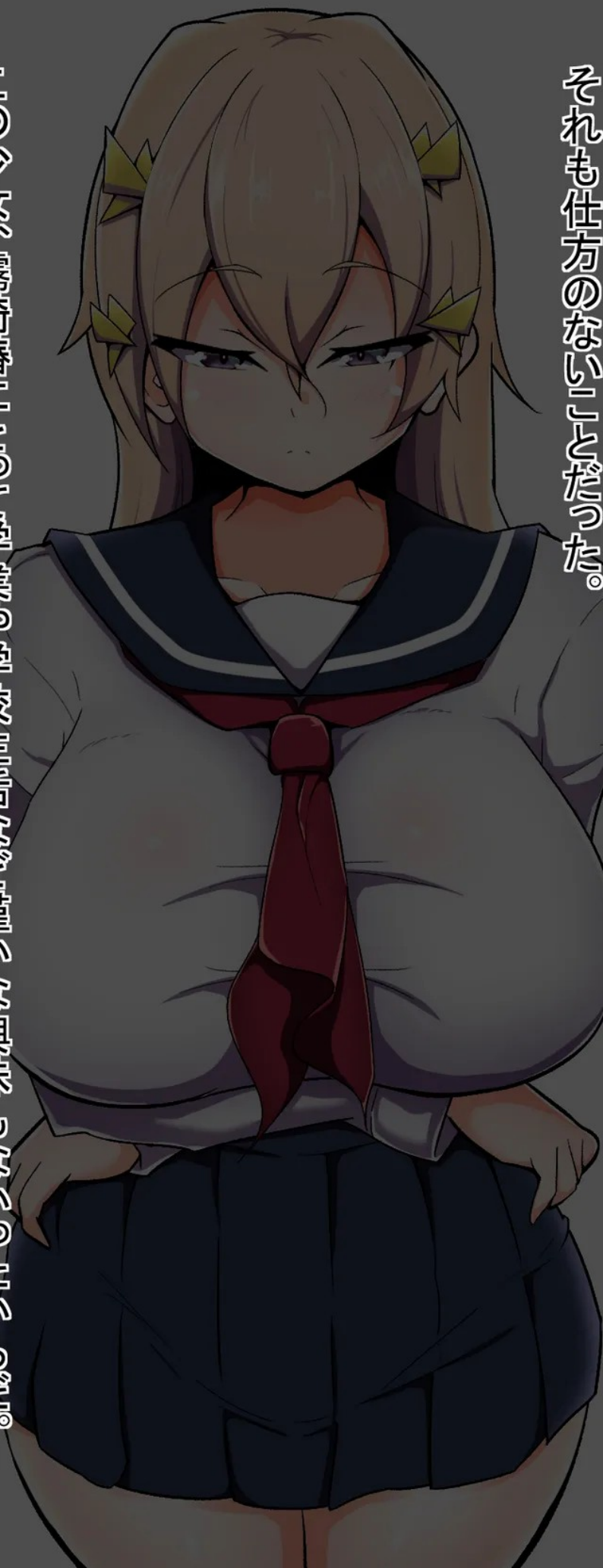


体内の『気』を用いて闘う退魔師とは異なり
黒木たちが利用するのは科学の力だ。
少女が無傷で帰還することができたのもこの力があつたからだ。



「それはそうと、どうだい学校は」
「……べつに、どうとも」

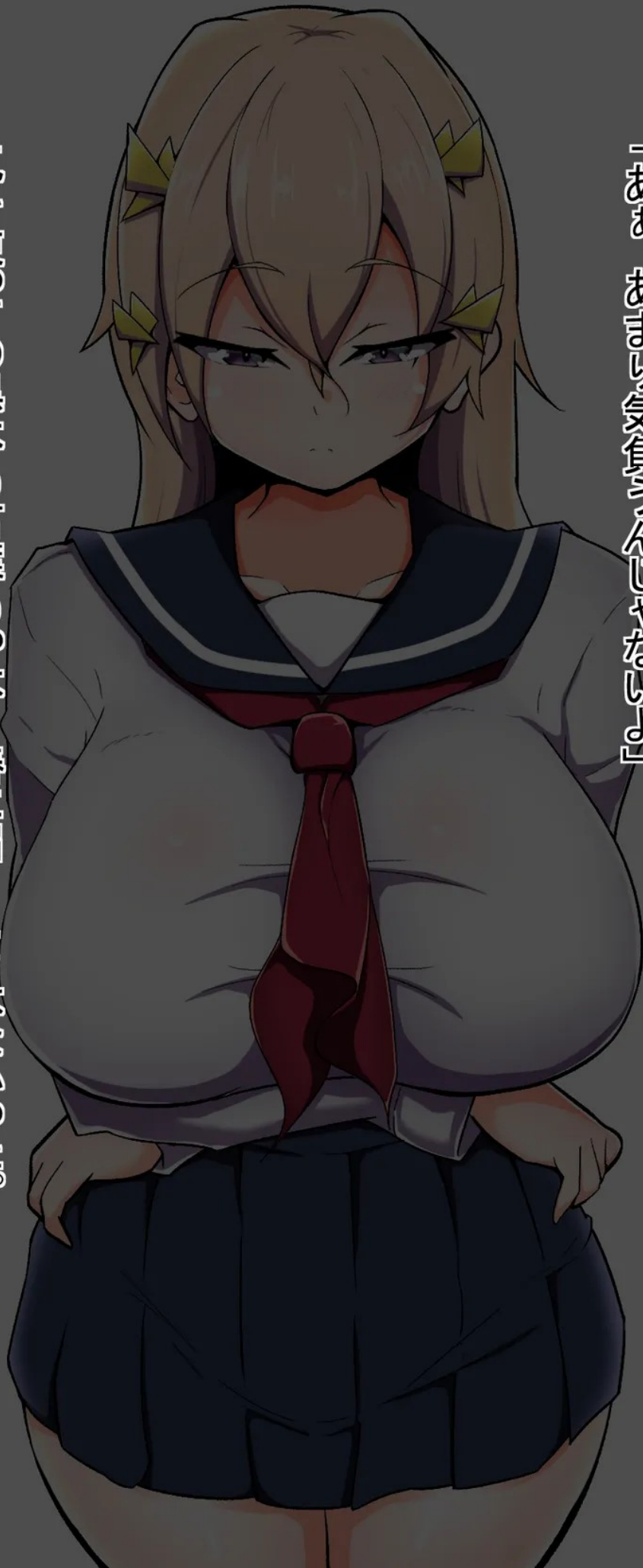
やはり素っ気のない態度に黒木は苦笑いを浮かべずにはいられない。
それも仕方のない」とだった。



この少女、霧崎椿にとって学業や学校生活など僅かな興味もなかったからだ。
黒木の執拗な勧めで仕方なく通ってはいるが
そうでなければ淫魔の討伐に明け暮れていただろう。
淫魔に親を殺された椿にとって
復讐以外に気を取られている暇はなかったのだ。

「それでは失礼します」
「ああ、あまり気負うんじゃないよ」

気を使つての黒木も言葉もやはり椿に届くことはなかった。





『姉さま、急に討伐の任務が入りましたので先に帰ってください』

携帯に届いたメールを見て椿の表情が僅かに落ち込んだ。

普段鉄面皮である椿だが、それが緩むのが妹である菖蒲である菖蒲が関わったときだ。同じ境遇であり二つ歳下の妹である菖蒲には冷酷な椿も甘くなってしまうのだった。

この日は二人の時間を過ごす予定だったが菖蒲もまた組織に属している。任務が入ってしまったのであればそれも仕方のないことだった。

『気をつけてね』

そうメールを返信し、帰路につこうとした時だった。その男が話しかけてきたのは。







極力目立ってはいけない。
組織に属する椿は常々そう言い聞かされていた。
それが彼女にとっての悪夢の始まりだった。

「いやあ、君のようなべっぴんさんがまさか引つかかるなんてね」
「……」

男の下卑た言葉にも椿は表情「つ変える」こともない。



淫魔討伐の任務を任せられていたのであればまた結果も違っていただろう。
こんな男のナンパなど相手することなく、討伐に向かっていたからだ。
しかし、そうでない椿にとっては目立たないことが第一だった。
変ないざこざを起すよりは、と男にホテルまで連れられてきていたのだ。

「こんなデカパイちゃん、なかなかいいよ」
「……」

男は執拗に椿の乳房を揉みほぐしていたが、椿の反応は冷ややかなものだった。
気色の悪さ、嫌悪感はい際限なく溢れ、心地よさなど微塵も感じない。
そんな淡々とした椿の態度を気にすることもなく
男は椿の胸を揉みほぐし続けていた。





男は執拗に椿の乳房を揉みほぐしていたが
椿の反応は冷やややかなものだった。
気色の悪さ、嫌悪感は際限なく溢れ、心地よさなど微塵も感じない。
そんな淡々とした椿の態度を気にすることもなく
男は椿の胸を揉みほぐし続けていた。

「くっふ」

それが一時間も続いただろうか。

あまりに執拗に続く愛撫に椿は始めて吐息を漏らした。

それは延々と続けられた愛撫に対する反応だと

椿は気に留める様子もなかった。

しかし、椿は気づいていない。

その旨の火照りは「これまで経験したことが
ないほどのものになっている」と。





さらに三十分が経過し、椿の呼吸もさらに荒々しいものへ変化していた。
男の愛撫は入念でとても丁寧なものだった。
痛みを与えることは一切なく
それが延々続くことで嫌でも椿の身体は反応していった。

「んっ、あ、んっ、んっ」

そのせいで制服の上から乳首を擦られるだけでも
全身に快樂電流が走ってしまう。



さらに三十分。

今度は乳首だけでなくスプレンス乳腺をも執拗に愛撫していく。

すでに乳首は本気勃起状態。

乳房もじんと狂ってしまいそうなほど激しい熱に襲われていた。

「や、めなさい」

そうしてようやく危機感が芽生えたのか始めて椿は男を制止した。

しかし、武力行使にまでは至らない。

淫魔以外への能力の発動を禁じられているからだ。

当然、そんな羽々しい言葉で男が止まるはずもなく
椿の乳房は好き勝手に弄ばれ続けてしまうのだった。



(なに、「これは……」んな、感覚、始めて……ッ)

そんな熱を帯びた状態でさらに愛撫を続けられ
ついに椿の身体にもスイッチが入ってしまう。
下腹部からじわじわと込み上がってくる感覚。
まだ弱々しいもののそれが絶頂の予感だったのだが、
「これまで性経験が皆無の椿にはそれがなんなのが見当もつかなかった。

「ん……おッ！ おッ!!」

そんな状態でさらに愛撫が続く。

もはや声を我慢することもないようにで

椿はあられもない声を漏らしていた。

これは本当にマズい。それを本能で察したのか
椿を男をキツと睨みつける。

「「んな、」と、無駄です、いい加減にしないと――」



そう言い終える前だった。椿の言葉を遮るように
男は椿の乳房を思い切り揉みしだいた。
これまでの優しい愛撫が嘘のような力強い愛撫だ。

「……ッ」

突然全身を駆け巡る快楽の奔流。

あまりに強烈な感覚に椿は目を見開くことしかできなかった。
言葉を紡ぐことすらもにできなかった。

これが椿の生まれて始めての絶頂だった。

二時間を超え愛撫され続け、椿は乳房でアクメを迎えてしまっていたのだった。



「ん？」「この反応はイッたは始めてかい？」「りゃあ上物だな」
「……？」「……？」

生まれて初めての絶頂を迎えた椿には男の言葉もまともに入って「ない」。
身体の異常に困惑することしかできずにいた。



「さあ、「うちの具合はどうか」
「……ッ!? ふっ、んッ!!」

男の愛撫は椿の秘処にまで至る。
不意を突かれた椿はさらに困惑の色を濃くしていたが、
先程の絶頂のせいか抵抗を強める発想にまで達することはなかった。

それを良いことに秘処を擦る指の力が増していく。
大事な部位を弄ばれているにも拘らず
当初の気色の悪さや嫌悪感はなくなっていた。
それどころか快楽で頭の中は快楽電流の火花が散り続けている。





軽く擦られているだけだというのに
あつという間に男の指には愛液が絡まりはじめていた。
ショーツも動揺で愛液でできた染みがじんわりと浮かび上がっている。
さらに先程絶頂を迎えたばかりの乳房も剥かれ露出を強要される。
直接乳首を指先で転がされ、秘処にばかり気を取られてもいられない。

「ぐっぐっぐっぐっぐっぐっ」

普段の彼女からは想像もできない乱れようだ。

もう二度とあのような痴態を晒すまいと必死に身体を強張らせている。
しかし、時折我慢の限界を超える快楽が走るようで

椿は何度も身体をビクつかせていた。

特に先程絶頂を迎えたせいか、敏感になった乳首の快感は堪らなかった。
そうして乳首にばかり気が向いていたその時だった。



「おお、ッ!?」

男の太い指が膣内に挿入されたのだ。
これまでとは比にならない強烈な快楽に
椿は獣のような声を上げてしまう。

しかもそれで終わりではなかった。
男はあっという間に椿のGスポットを捉え
そこを集中して責めはじめたのだ。





「……ッ!!——ッッ!!」

快楽に耐性のない椿がそれを耐えられるはずがなかった。
発情しきったメスの身体は呆気なく絶頂を迎え
男の指にしゃぶりついてしまうのだった。

「よしよし準備は」の程度にしておくか」

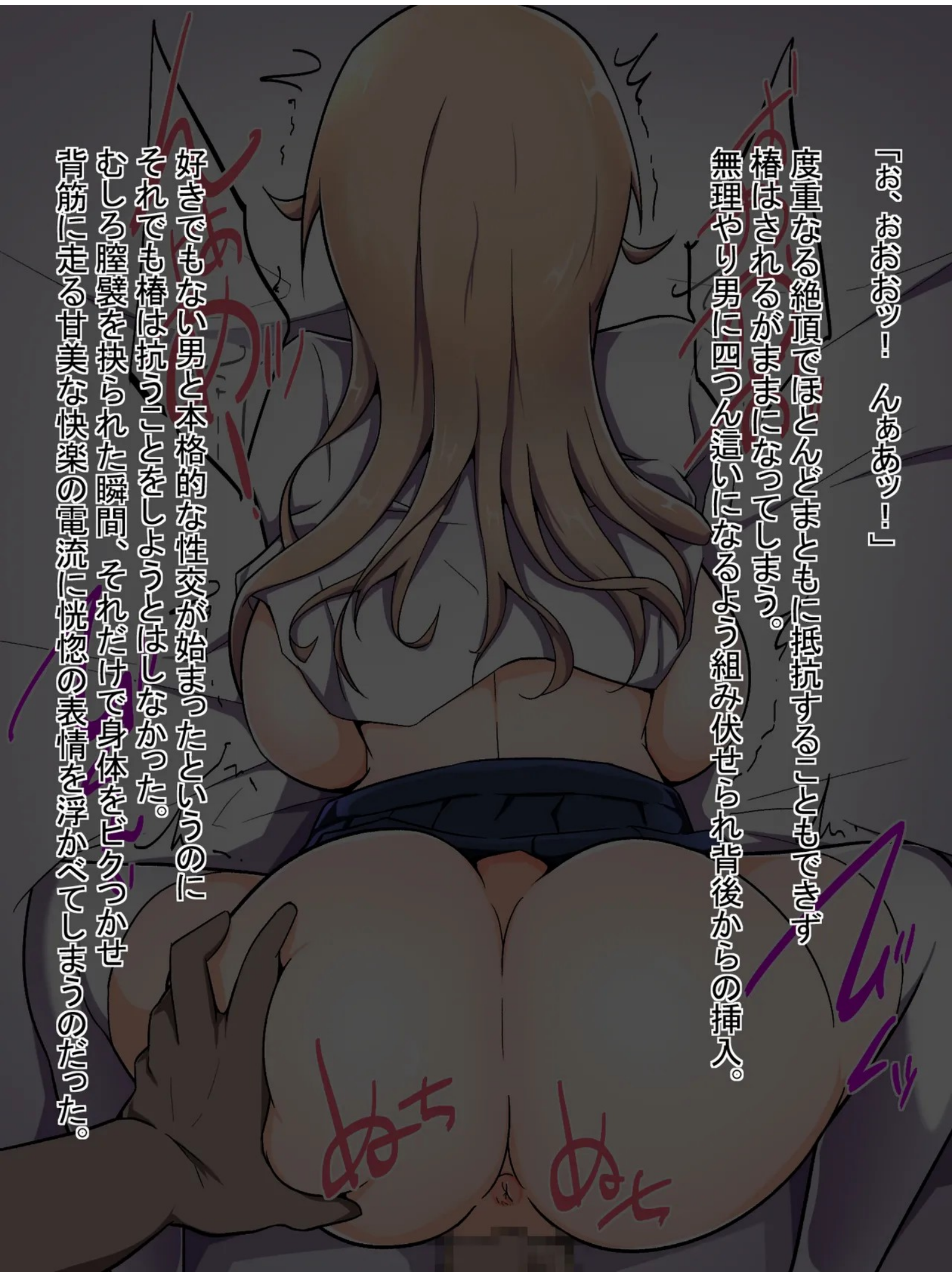
前戯だけで二度もアクメを迎えてしまっていたが
「これで終わりではない。
椿が快楽に狂わされていくのはまだまだだ」それが始まりだった。



「お、おおおッ！ んああッ！」

度重なる絶頂でほとんどまともに抵抗する「」ともできず
椿はされるがままになってしまふ。
無理やり男に四つん這いになるよう組み伏せられ背後からの挿入。

好きでもない男と本格的な性交が始まったというのに
それでも椿は抗うことをしようとはしなかった。
むしろ膣壁を挟まれた瞬間、それだけで身体をビクつかせ
背筋に走る甘美な快楽の電流に恍惚の表情を浮かべてしまふのだった。





「んひっ！ おおっ！ おッ！！」

次第に椿の嬌声は絶え間ないものへと変化。

膣奥、子宮に亀頭が届いたときには

椿はこれまでにしたことのないような下品な顔を浮かべてしまっていた。しかし、男は幻滅するどころか興奮を増し肉棒のピストンを始める。亀頭の雁首が膣壁を抉る感覚。



「おおおおッ!!」

これまで経験したことのない快楽に椿は野太い嬌声を漏らす。
次第に激しさを増していくピストンにやはり椿はどうすることもできなかった。

（だめ、この……感覚は……ッ！）

そして再び襲ってくる絶頂の予感。
理性を削ぐような快感を知っている椿は
それだけは許すまいと身体を強張らせる。
しかし、これまで快感に耐性のなかった椿が急に耐えられるはずもなかった。

「ほれ、またイクのか？ イク時はちゃんとイクと報告するんだぞ」

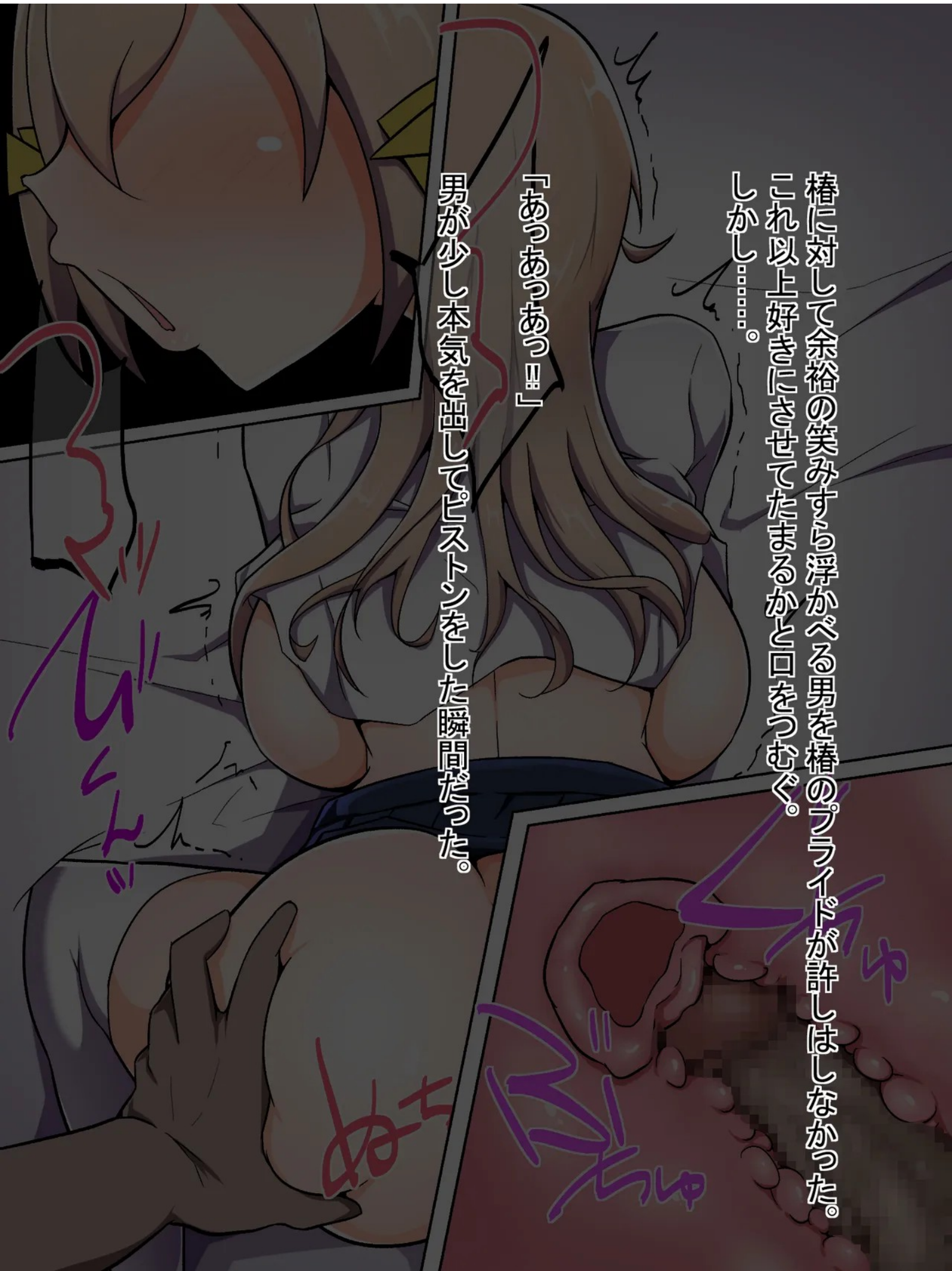
あはれ

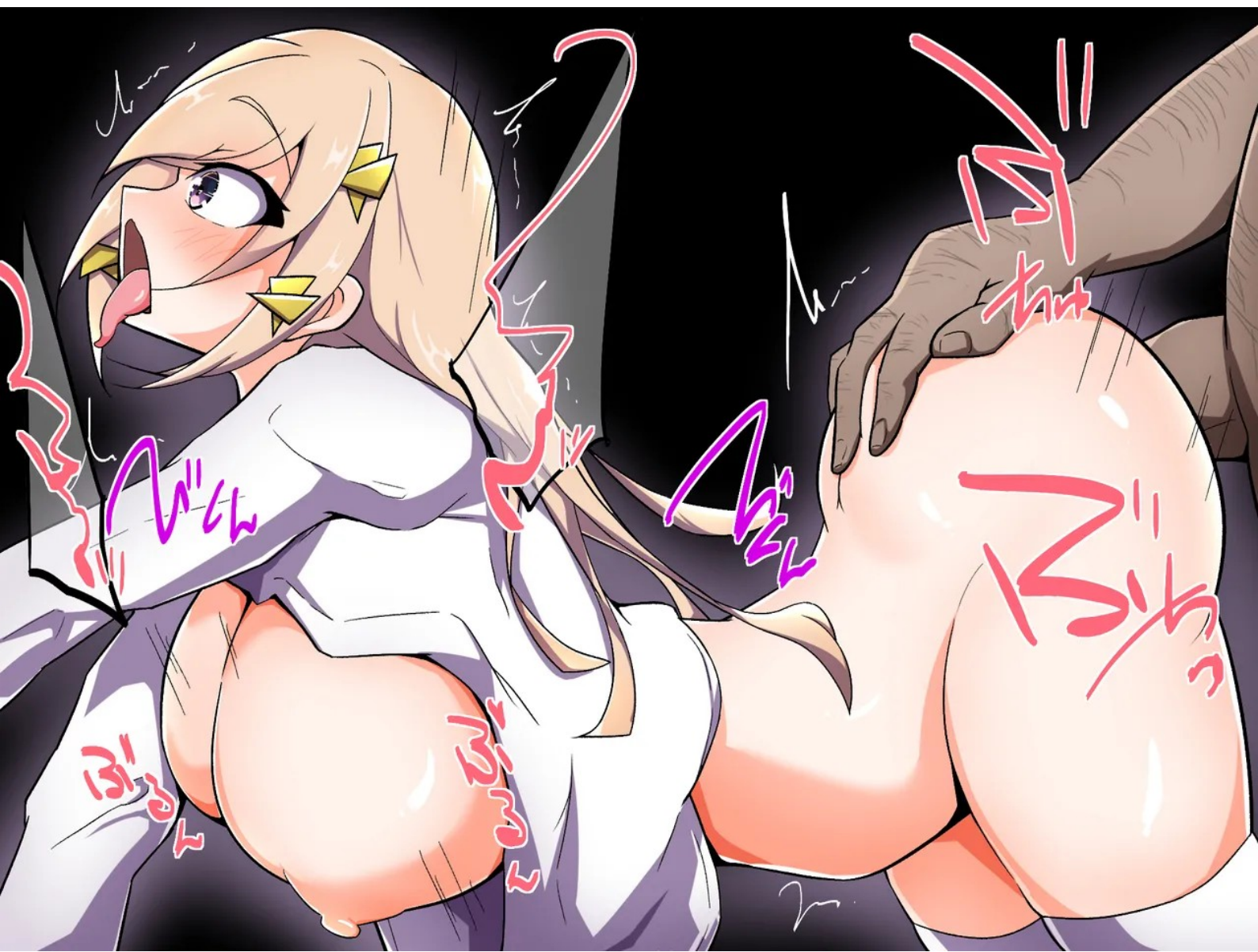


椿に対して余裕の笑みすら浮かべる男を椿のプライドが許しはしなかった。
これ以上好きにさせてたまるかと口をつむぐ。
しかし……。

「あっあっあっ!!」

男が少し本気を出してピストンをした瞬間だった。





「……ッ」

椿はそれだけで軽く絶頂を迎えてしまっていた。

少女に絶頂を強要した男であったが
黙ってアクメを食っていることが許せなかったのだろう。
これまでゆったりしていたピストンに一気に力を込めた。

「ッ」

これまでとは桁違いの快感に椿は大きく目を見開いた。
そして、つい先程絶頂を迎え鋭敏になった身体は
呆気なく次の絶頂へ上り詰めてしまう。



「……ッ!!……ッ!!」
「イク時はイク、だろっ!」

絶頂させるだけには飽き足らず
男は椿の尻を叩いて調教を続ける。
絶頂を迎えることさらに鋭敏さを増し
再び絶頂を迎えるという負のスパイラル。

それは椿が屈服する「こと」で
ようやく断ち切られる「こと」となる。
椿の膣内の締め付けが激しさを増し
ついに男が限界を迎えた瞬間だった。





2000

כ



「イッぐ、いぐいぐっ!! ぐぐぐぐぐぐぐぐ!!」

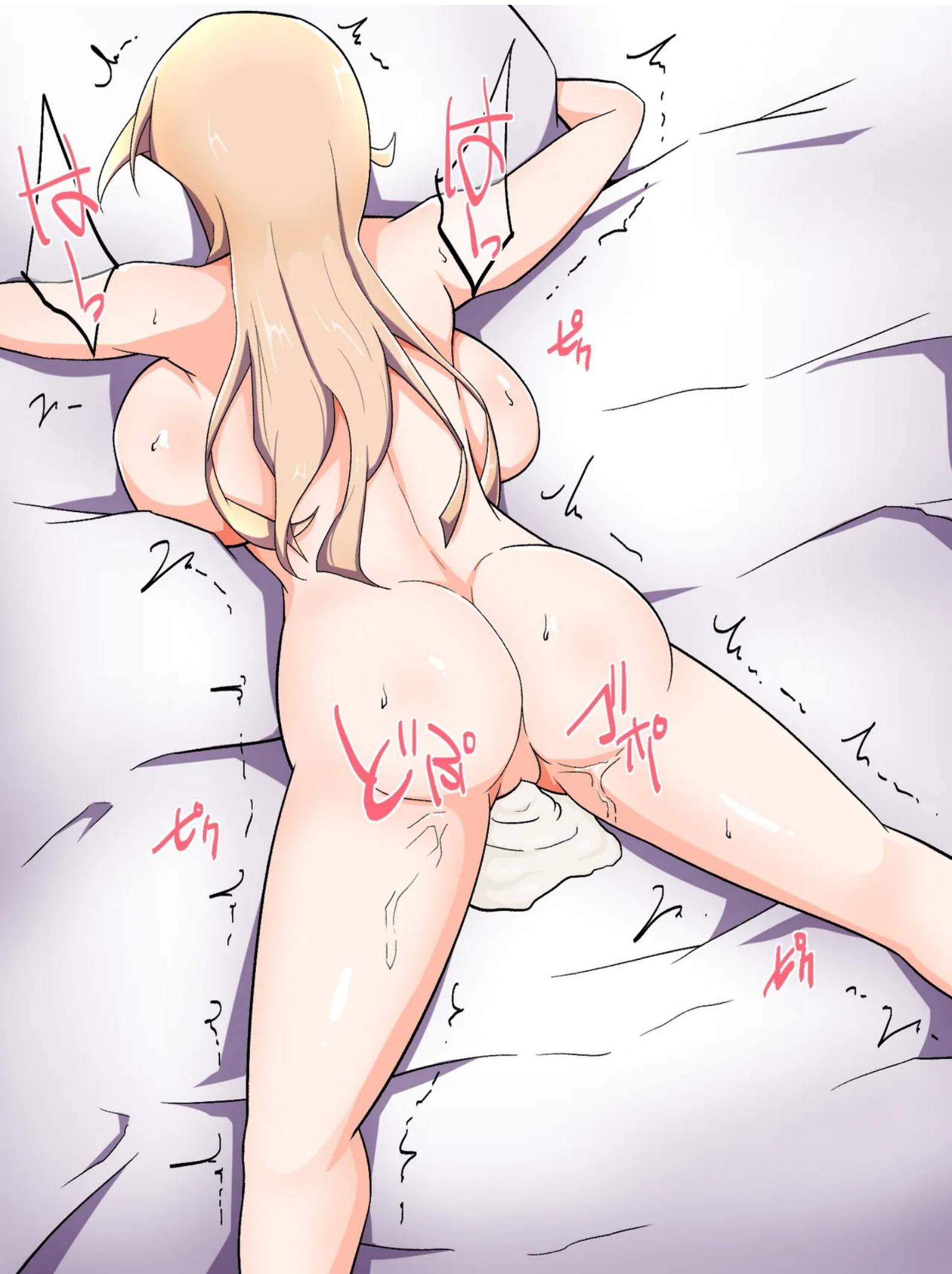
あまりの快楽について絶頂宣言をしてしまう。

激しく背を仰け反らせアクメを貪る椿だったが

男はまだ椿を休めることはしない。

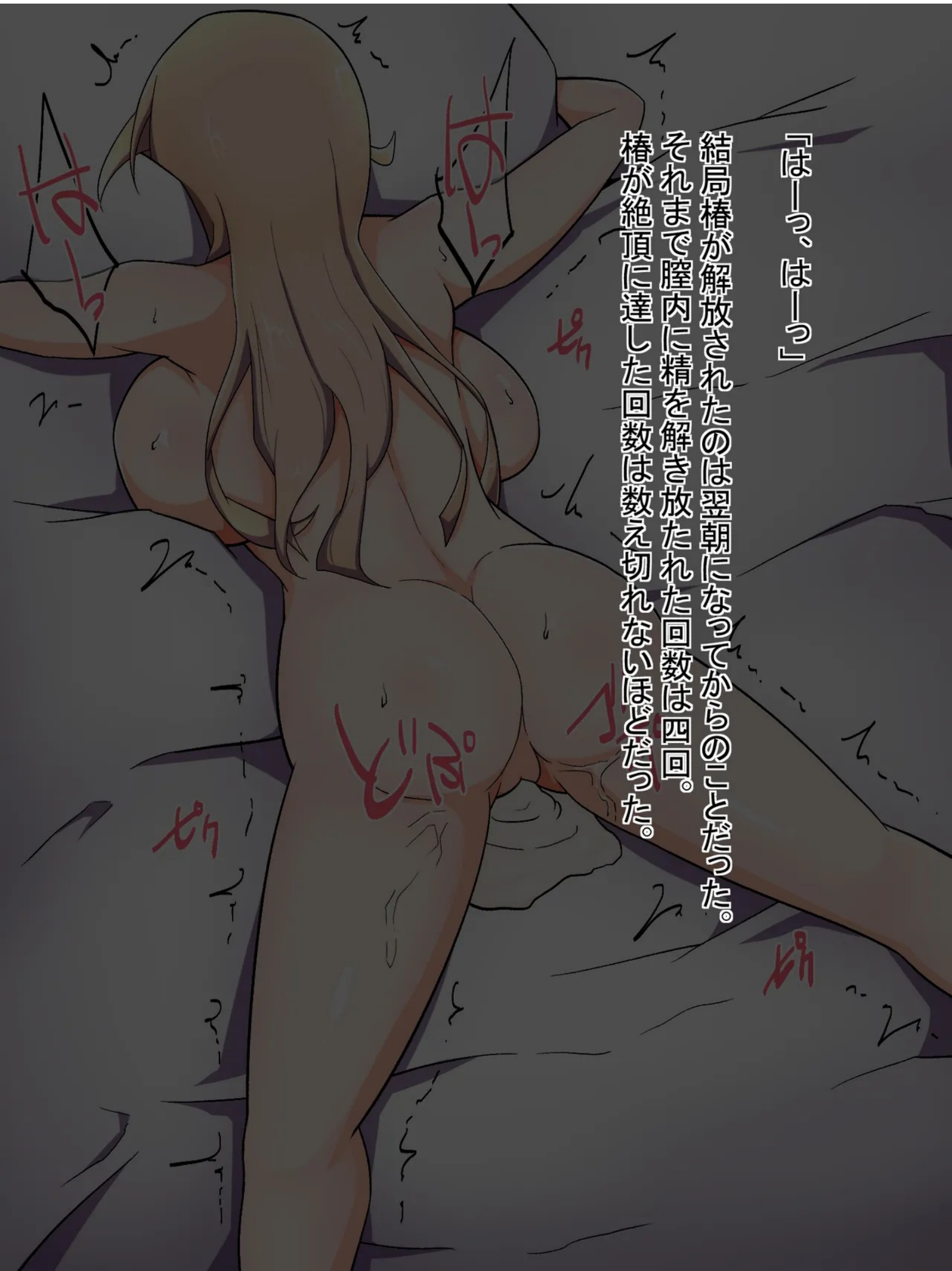
射精したばかりだというのにさらに体勢を変え椿を犯し始めたのだった。

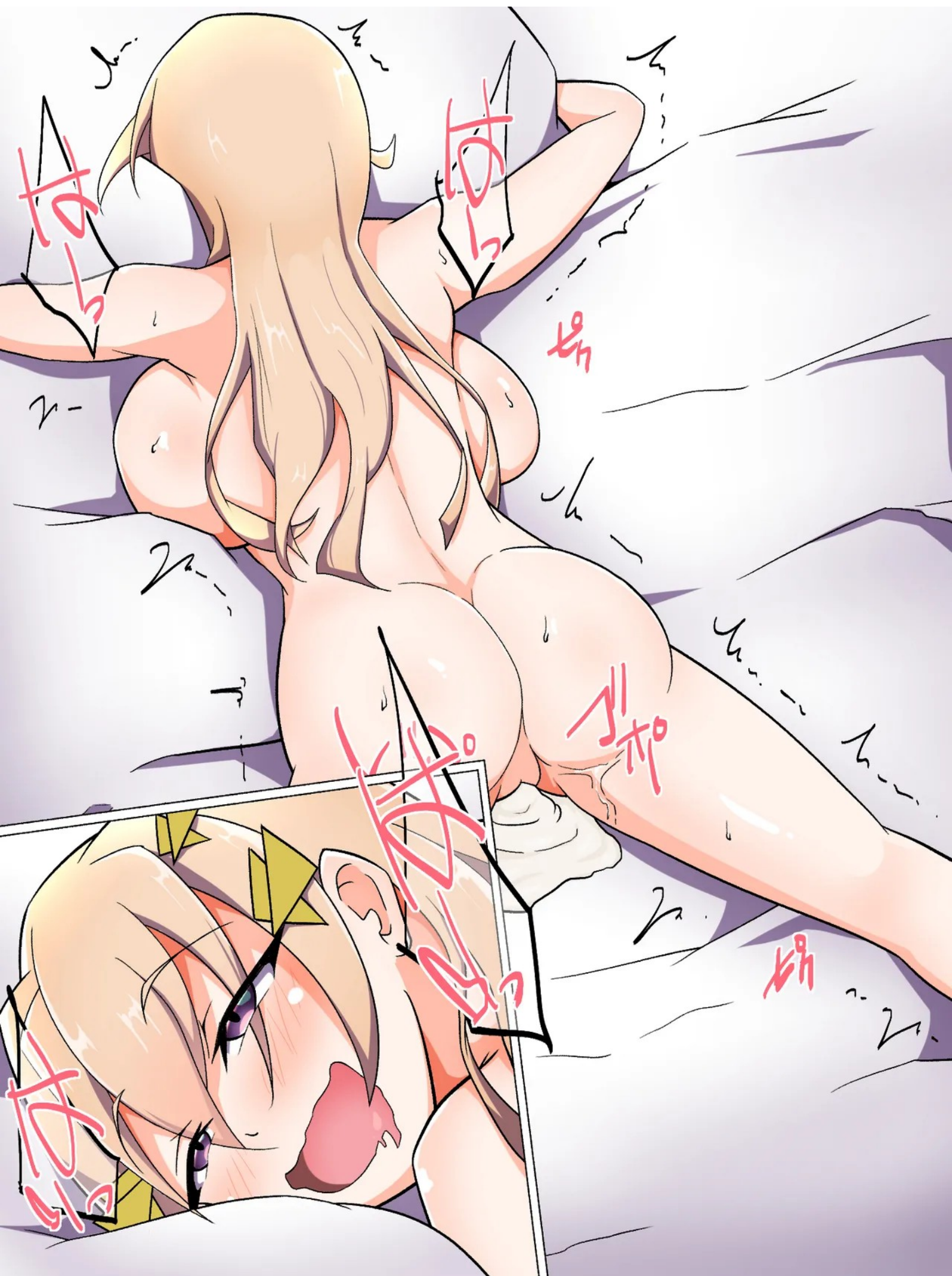


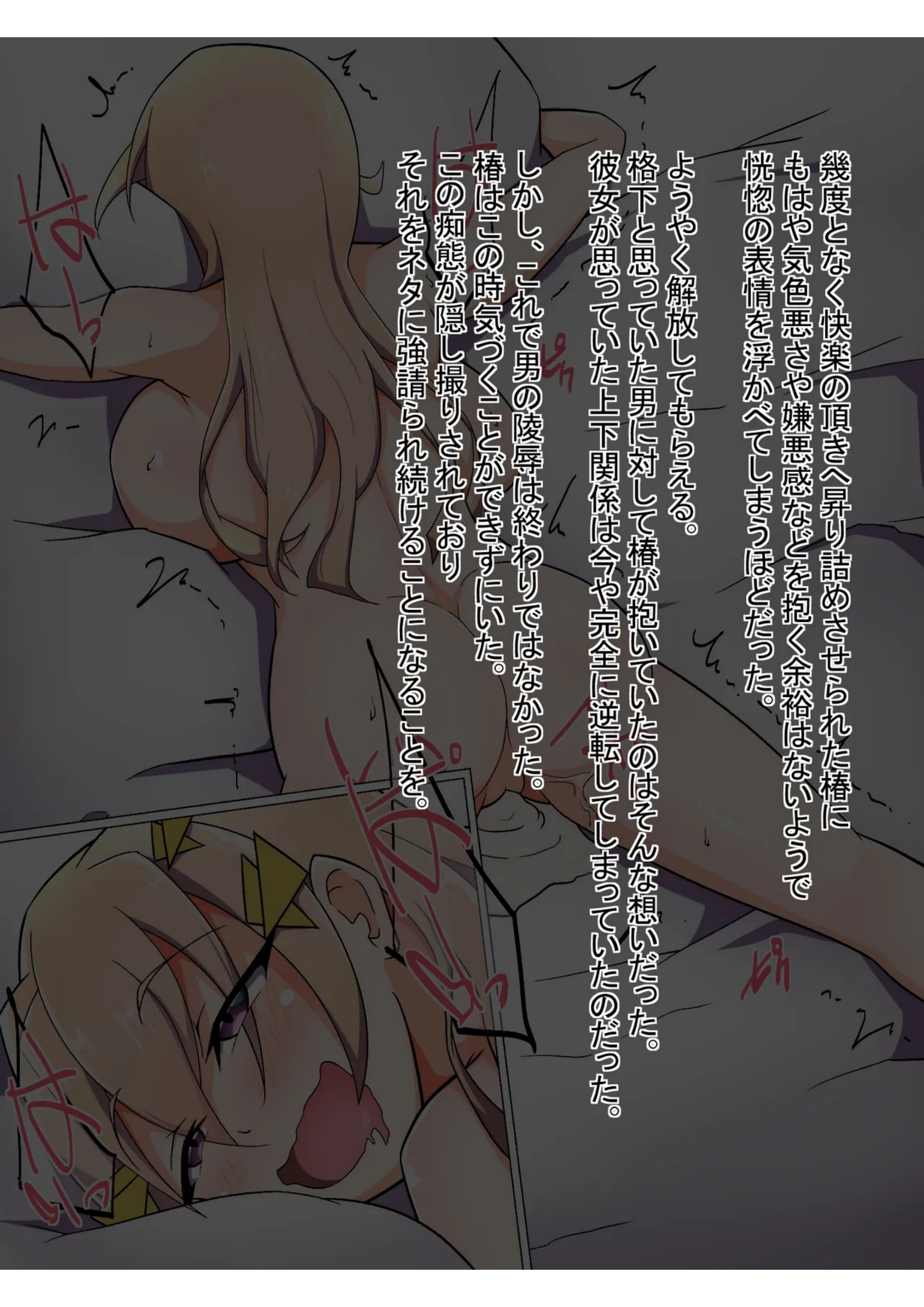


「はーっ、はーっ」

結局椿が解放されたのは翌朝になってからのことだった。
それまで膣内に精を解き放たれた回数は四回。
椿が絶頂に達した回数は数え切れないほどだった。







幾度となく快樂の頂きへ昇り詰めさせられた椿にもはや気色悪さや嫌悪感などを抱く余裕はないよう
で恍惚の表情を浮かべてしまうほどだった。

ようやく解放してもらえる。

格下と思っていた男に対して椿が抱いていたのはそんな想いだった。
彼女が思っていた上下関係は今や完全に逆転してしまっていたのだった。

しかし、これで男の陵辱は終わりではなかった。

椿はこの時気づくことができずにいた。

この痴態が隠し撮りされており

それをネタに強請られ続けることになることを。



「おっ！ おおおっ！！」

そしてこの目も椿は性の掃き溜めとして好き勝手に弄ばれていた。
この男の厄介なところは決して強要しないところだった。

淫魔討伐の任務で男の誘いに応えることができない場合は
しつこく要求してくることもない。

もし執拗に脅してくるようであればそれこそ武力行使する「」ができたが
それをする「」ともできなかった。

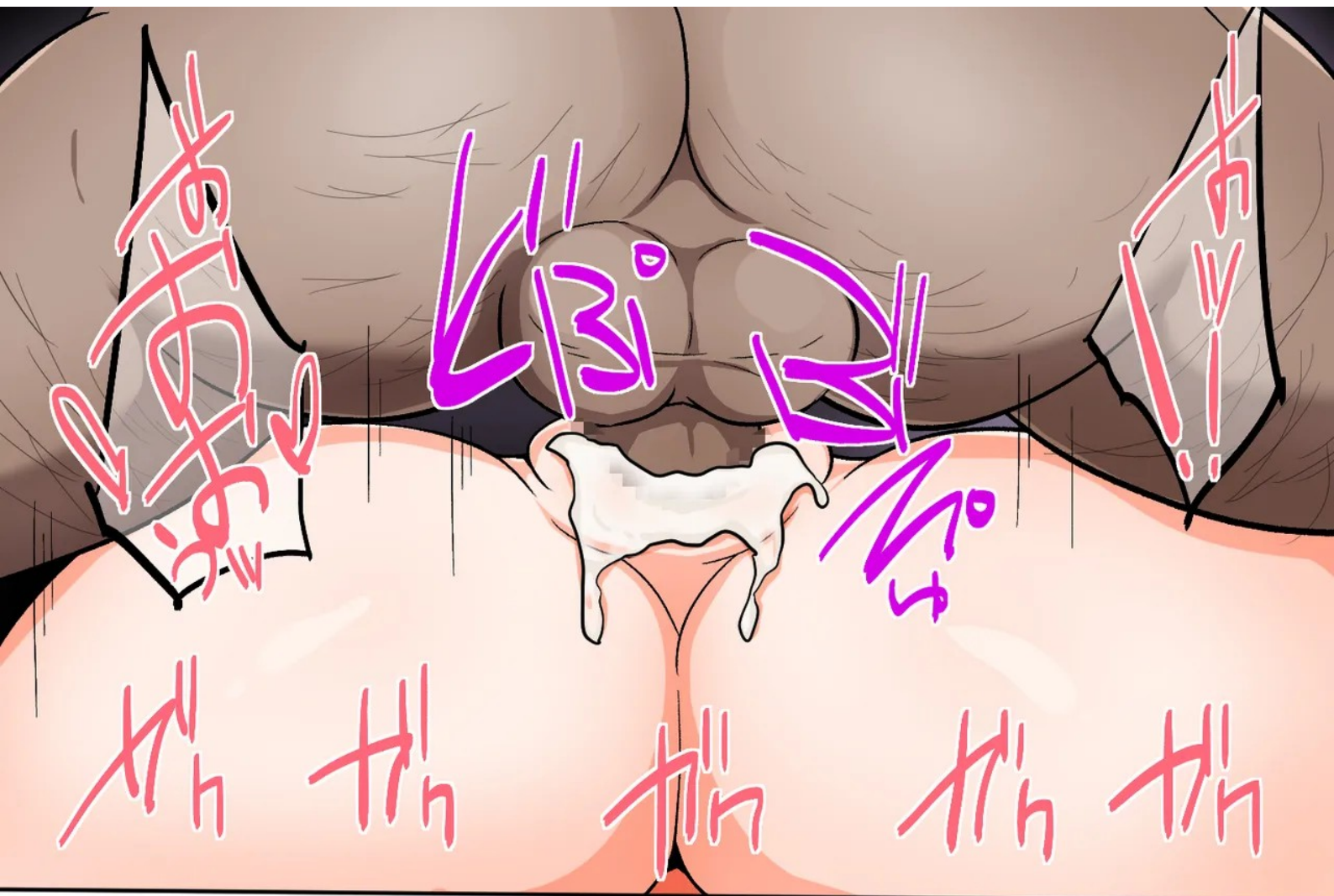
代わりに応えた時の扱いは悲惨なものだった。

決して避妊などさせてはもらえず、何度もなんども性を解き放たれた。

しかも男の性技は椿を用意に翻弄するもので椿はされるがまま

際限なく絶頂を強要されてしまうのだった。

それを繰り返していくうちに二人の上下関係はより明確なものへ変化していく。



「はっ、はっ！」

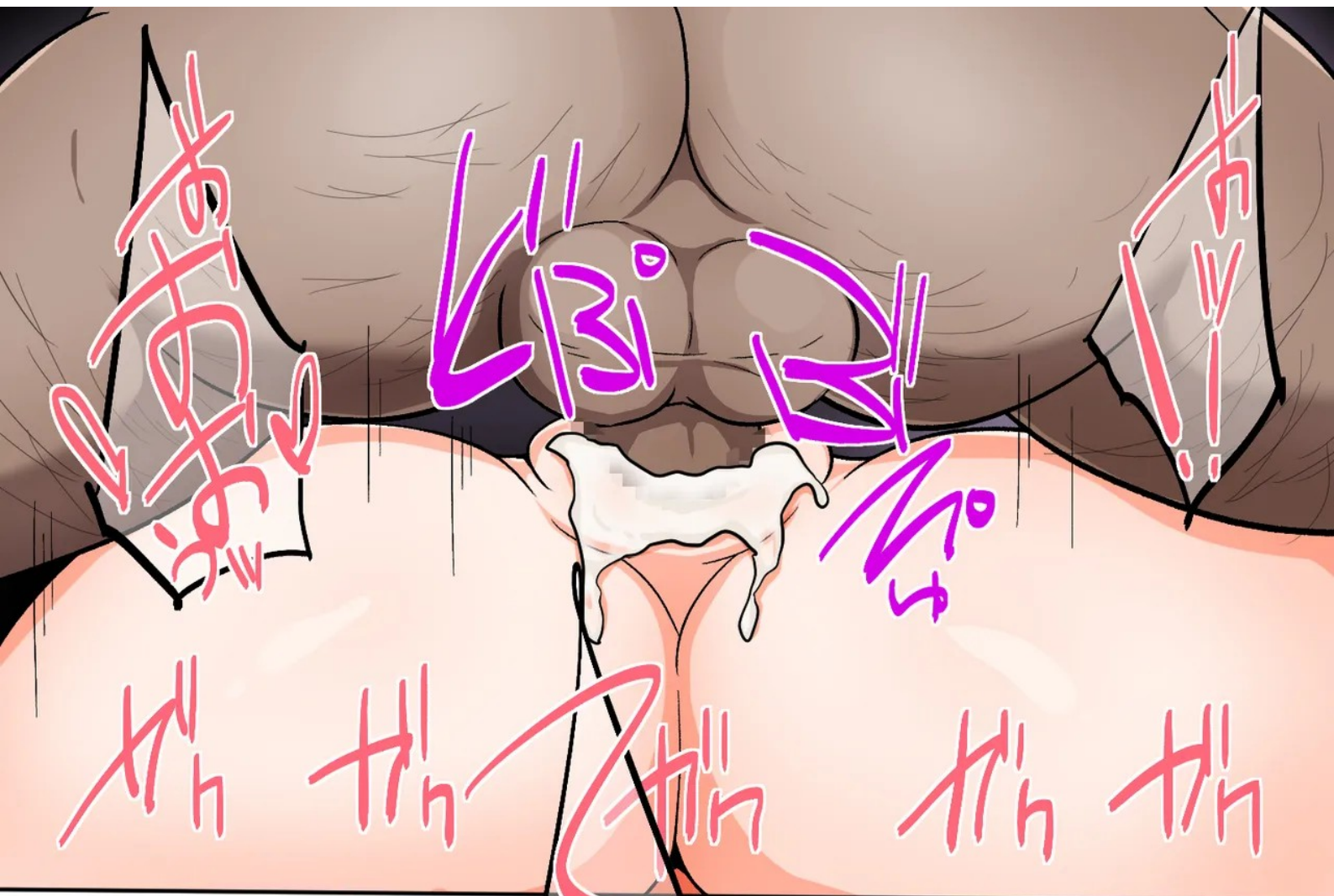
いつしか椿は懇願するように男を見つめていた。
すでに「」の目は三回も中出しを許している。

「も、もう、イキました！ ずっと、イッてますからっ！」

必死な懇願も男には届かない。

四回目にもなるというのに男の射精の勢いは衰えることを知らない。

子宮を精液が叩かれた瞬間、椿は呆気なく絶頂を迎えてしまう。



「……ッ!!」

この数回の性交で男に完全に性感帯を把握されてしまった。
男の意思次第で容易に絶頂を強要されてしまうのだった。
しかし、椿は完全に屈したわけではない。

時折見せる反抗の眼差し。

それは椿のプライドの高さを表していたが
同時に男の嗜虐心を煽る結果にもなっていた。



（あと、あと数回、「この男を果てさせれば、今日は終わる、はず」

男に背を向ける形で騎乗位をするよう命令された椿は
ただただ終わらせるため必死に腰を振り続けていた。

連日男との性交を続けた椿の腰使いは様になっており

並の男であれば容易に果てさせることができていただろう。

しかし、同時に「」を換えられれば快楽を得られるのかを知ってしまった。
それまで性経験の浅かった椿はその誘惑を無視することができず
時折肉棒を性感帯に押し当ててしまっていた。





「あ、おおおっ！」

その瞬間、全身に走る強烈な快感。

その時ばかりは男に抗う意思は完全に折られ快楽を貪ってしまうのだった。

「あっ、あっ、ふ——っ！」

そしてその大きさに合わせて腰使いも荒々しくなっていく。

その勢いは換るポイントを自ら選ぶことを許さず

自然と心地の良い方へと割合が増えていくのだった。



Gスポットや子宮口。

それらを扱われる度に昇りつめていくのを自覚せずにはいられなかった。しかし、それでも腰を振るのをやめることができない。男に命令されているからか。それとも自らの本能に従ってなのか。いづれにせよ再び椿は絶頂へ昇りつめていく。

「んっ、おぉッ!!!」

そして亀頭が一度強く子宮口を挟った瞬間だった。





『……』

椿は呆気なく絶頂を迎えてしまった「」になる。
身体がビクビクと痙攣し思うように動いてはくれない。
しかし、それでも椿の芯が折れる「」とはなかった。

（「」のまま、好きにさせてなるもの、ですか）

反抗の意思は男に気づかれぬまま「」の目は解放される。
やはり「」の目も男に思い知らせる「」とはできなかった。

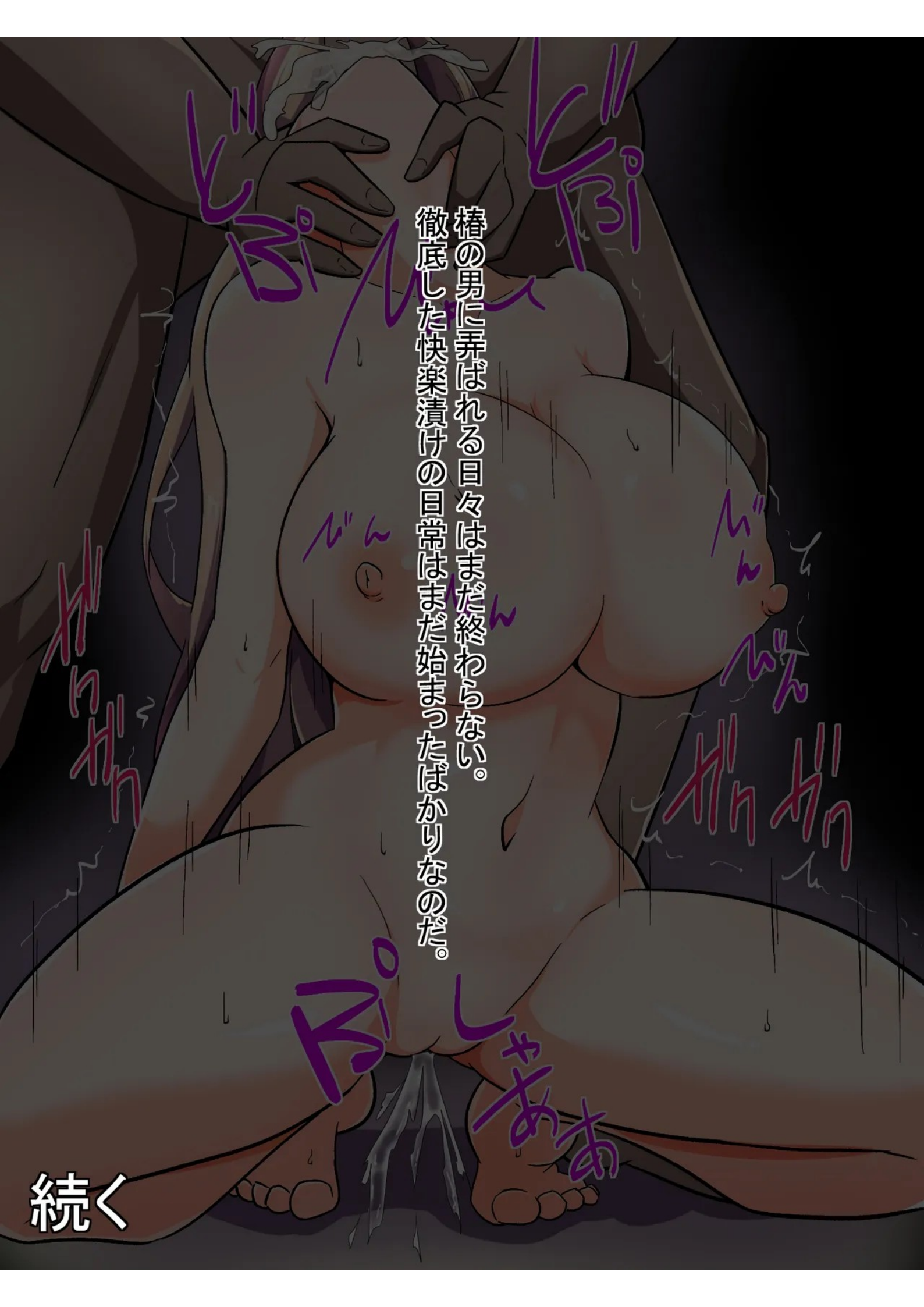


『……ッ!』

それどころか男の行為はエスカレートしていく。
喉奥まで肉棒を押し込まれ射精までされたのだ。

しかし、快楽を一度刻まれた椿には嫌悪する余裕すら残されてはいなかった。
これまでの度重なる陵辱で火がついた被虐心のせいで背筋にはゾクゾクとした
心地のよい悪寒が走り喉奥に射精された瞬間潮吹きまでしてしまっていた。





椿の男に弄ばれる日々はまだ終わらない。
徹底した快楽漬けの日常はまだ始まったばかりなのだ。

続く



